

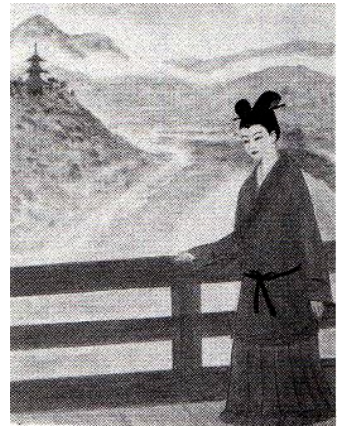
まぼろしの河内大橋

『しなてる ^{かたしはがわ}片足川の ^{にぬ}さ丹塗りの 大橋の上ゆ
紅の ^{あかも}赤装裾引き ^{さんす}山藍もち 摺れる絹着て ただ
ひとり い渡らす ^こ児は 若草の ^{つま}夫があるらむ ^{かし}櫓
の実の ひとりか寝らむ 間はまくの ^{わがも}欲しき我妹
が 家知らなく』 (巻9 - 1742)

奈良時代の歌人・高橋虫麻呂の長歌で、題詞に「河内の大橋を独り行く娘を見る歌」とある。

歌の意は、片足川に架けられた大橋を、ただ独りで渡っているあの娘は、夫があるのだろうか、それとも独り身なのか、訊ねてみたいけどあの娘がどこの誰なのかそれさえ知らない、というようなことだろうか。

まるで幻想のように、丹塗りの橋の上の女性が色彩豊かに表現されている。古代には橋は彼岸の異空間へ誘うものとされた。そこからこの歌は憧れの女性への適えられない恋の孤独感を歌った歌で、現実の風景ではなく虫麻呂の心象風景という解釈もある。しかしそれにしてもあまりにも歌の風景は具体的で、大和川の風景に合っている。確かに河内大橋は古代の風景の中に色鮮やかに架けられていたのである。しかしそれが何時ごろ、何処にあったのか 考えてみたい。



河内大橋は誰が架けたのか

歌にある片足川というのは古代の大和川のこと、「河内の大橋」とあるから河内の国を流れているところに橋は架けられていたことは間違いない。

河内大橋を語る文献として、奈良時代の『大般若経』の写経が見つかっている。これは『^{いえはらむらちしききょう}家原邑知識経』というもので、写経の由来が以下のように記されている。

『昔、河東の化主と称され、お名前を万福法師と申す方がおられた。法師は造橋の技術に優れ、衆生を彼岸に渡す願いを来世へかけて起こされた。これは天平十一年から十二年の冬にかけてのことだが、法師は初志を終えることは出来なかった。そのため広い橋を改修しようとして、^{かえいぜんし}花影禅師は四弘の誓願を起し、万福法師の志しを継がれた。このことで禅師は父母のような存在となった。ここにわれわれ家原村の男女長幼はその教化にあづかることが出来、つつしんでうやまって大般若経……』を加え写した、というのだ。

家原村は現在の柏原市安堂付近で、河内六寺の家原寺があったところ。天平十一年ごろ、万福法師という僧が橋を架けようとしたが完成せず、その志しを継い

だ花影禅師がそれを完成させた。それは国の仕事ではなくどうも知識によって行なわれたらしく、家原村の衆生が万福法師や花影禅師の指導で橋を掛け、それが完成したことで、仏への感謝の意で般若経を写し納めたという。

知識については、この冊子に知識寺の項があるが、ここでも知識で橋が架けられた。橋を架けることは実利的な理由だけではなく、彼岸へ渡るものという仏教的思想もある。不思議なことにこの時代の河内の人々は国が出来ないことを自分たちでやってのけ、それを仏の教えと考える文化があったのであろうか。

問題はその橋の場所だが、古代の竜田道が渋川道に繋がるあたりで、後年の大和川付け替え地のあたり、近鉄柏原線の渡河地あたりと考えられる。そこは大和川の右岸に古代の河内六寺の知識寺や家原寺が築かれた場所で、左岸には船橋寺があり、河内の国府もこの付近にあったと考えられているからである。

高橋虫麻呂が河内大橋を見て歌を詠んだのはいつ頃のことか

河内大橋が架かる竜田道は奈良時代、平城京と難波京を結ぶ幹線道路だった。とすれば聖武天皇の難波宮への行幸の際に虫麻呂が随行して大橋の歌を詠んだと思われる。前述の『家原邑知識経』から大橋が完成したのは754年（天平勝宝6年）である。なぜならの経巻の日付がこの年で、高橋虫麻呂が歌を詠んだのはこれ以後ということになる。

聖武天皇の難波宮への行幸は最初は740年で、744年には難波宮への遷都で多くの官人が通ったと思われるが、この時はまだ橋は渡れたとしても完成はしていなかった。完成した754年以後で行幸があったのは、2年後の756年、この時は既に孝謙天皇に譲位の後で、聖武上皇、光明皇太后、孝謙天皇の一家で難波宮へ行幸している。当然随行の人々も多く、華やかなものであったであろう。たぶん、この時に虫麻呂も随行しており、美しい橋の上を華やかに渡る貴人たちを眺めて、河内大橋の麗人を連想したのではないだろうか。

古代の行幸路、河内大橋の姿

奈良時代には聖武天皇をはじめ、難波宮への行幸がたびたびあった。そのルートは平城京の朱雀大路を南へ下り、北の横大路から竜田道に入り、大和川の右岸に沿って山越えをして安堂へ下った。安堂には河内六寺の古代寺院が薨を連ねており、そこで河内大橋を渡る。橋を渡ると船橋廢寺や河内国府があり、そこから北西に渋川道が伸びていた。渋川道は大和川左岸の堤防を進み、平野川の分岐点から平野川に沿って四天王寺に至ったと考えられる。このルートのほぼ半ば、西から来ても東から来ても、人々は河内大橋の向こうに彼岸の国を見たのである。

（資料 河内大橋 平成24年春季企画展冊子 柏原市立歴史資料館）